

「1964 東京オリンピック」を想い 「2020 東京オリンピック」に願う

沖縄県 宮城 勇

去る 3 月 12 日、東京オリンピック開会式まで「500 日!」、の報道がありました。メイン競技場の建設も着々と進み、今年 11 月には完成予定とのこと。開幕へのカウントダウンがいよいよ音高く響いてきました。64 年当時「世紀の祭典」と謳われ、百年に一度のチャンスと言われたオリンピックが、56 年の時を経て再び東京神宮の杜を中心に繰り広げられます。嬉しい限りです。1964 年。思えば終戦から 19 年、日本中がいわゆる復興の最中でした。全ての国民が輝く未来を夢見た年でもありました。そして新幹線、モノレールが登場し、高速道路、日本武道館も完成しました。「1964 東京五輪」は文字通り新生日本の幕開けとなり、日本が世界に向け大きく飛躍する転機ともなりました。オリンピック第一のコンセプトは「世界平和」。そしてシンボルは「五輪旗」と「聖火」です。ギリシャ・オリンピアで太陽光から採火された聖火は中近東、アジアを経て日本に運ぶルートでした。五輪関係者の特段の配慮で、日本の第一到着地が沖縄と決定されました。当時の本土紙には「日本の表玄関・那覇空港に聖火到着」などと大見出しの文字が躍っていました。沖縄が本土復帰する 8 年前の出来事です。大戦で唯一の地上戦を体験した沖縄での聖火リレーは、まさに平和を希求する「命の叫びの炎」であり、その意義はとりわけ大きかったと回想しています。9 月 7 日、沖縄に到着した聖火は、当初の予想をはるかに超える人の波、日の丸の波、国内外の取材陣の波の中でスタートし、ほぼ全島を縦断する形で無事終わりました。「聖火万歳」を三唱する光景も随所で見られ、糸満市のコースでは、遺影を胸に聖火を迎える姿も見られました。沖縄でのリレーを終え、那覇空港から空輸された聖火はその後全国を巡り、10 月 10 日最終ランナー坂井義則さんの手で、国立競技場聖火台に点火されました。全国の走者 100,713 人。「東京五輪聖火リレー」集大成の瞬間でもありました。青天の霹靂でした。実は、わたくし宮城が那覇空港で聖火を迎え、国内第一走者の榮譽にあずかりました。まさに身に余る光栄で、願ってもない人生の転機ともなりました。感謝の気持ちは年月を経て、歳を重ねるにつれますますます大きくなり、胸の奥で燃え続けています。この幸運は靖国神社に眠る父、保吉の導きの賜物だったと、社殿に身を入れて強く実感したことでした。2020 年国内聖火リレー出発地は、震災復興を祈念して福島県からスタートすることが決定しています。日本ならではの、侍ジャパンの国にふさわしい聖火リレー・祭典競技で世界各国のアスリート、観客を迎えてほしいと願っています。

